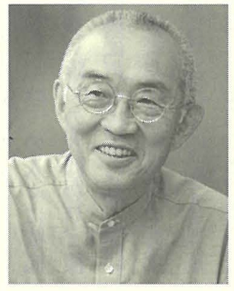
100年先を読む―㉔

金銭至上主義からの覚醒

東京大学名誉教授
月尾嘉男



横溢する我欲と残存する善心

本年三月に東北地方の太平洋岸に史上有数の被害をもたらした東日本大震災について、石原慎太郎・東京都知事（当時）が記者会見で、アメリカ国民を特徴づけている自由に相当する概念は日本国民にとっては我欲しかなく、今回の津波により、その積年の我欲を洗浄する必要がある。やはり震災は天罰である、と発言して物議をかもした。天罰については翌日撤回し陳謝となったが、我欲についての発言は作家ならではの重要な指摘である。

地震発生から数時間後に、東京都心にある自宅付近のスーパーマーケットに買い物に出掛けたところ、大半の食品が完売となった空疎な店内の出口で、女性が放射線対策用として有効とされる海苔の全量を購入している光景があった。用意万端という解釈もできるが、原子力発電所の付近であればともかく、当面は影響のない遠隔の土地での光景は、自分や家族の安全がすべてという、石原知事が指摘する我欲の典型とも解釈できる。

しかし一方、外国の新聞や放送が驚嘆して報道しているように、被災の現場では、アメリカや中国などでは当然のように発生する商店の略奪も発生せず、一台しかない公衆電話の行列が混乱することもなく、均等に配給された毛布を家族でもない老人に提供する女性や、崩壊した自宅を放置して人々を支援する若者が登場し、日本国民の天賦の素質が維持されていることも明確になった。今回の災害が浮上させた朗報である。

国民総幸福量の先見

この我欲が顕著になった原因は様々であるが、安全保障を外国に委任し、経済発展一筋に邁進してきた戦後の日本の構造が主要な要因であることは間違いない。その効果により、日本は敗戦の痛手から短期で世界二位の経済大国にまで発展することに成功したが、その一方で喪失したものも多大であった。その中でも最大の喪失が経済、もしくは金銭でしか物事を判断できない国民が主要勢力になったことである。

現在では有名になっているが、このような傾向を、すでに三六年前に警告した賢王が存在している。ヒマラヤ山麓にあるブータン王国の前王で、ブータンは経済指標であるGNPではなく、GNH（グロス・ナショナル・ハッピネス）を目指すと宣言したのである。この国民総幸福量とでも翻訳する概念は、石油危機からの脱却に奔走していた当時の世界には理解されなかったが、日本の新聞記者の質問に、賢王から以下のような回答があった。

要約すると「GNHはGNPよりもはるかに重要である。それは人々の幸福な生活を可能にする自然環境、精神文明、伝統文化、歴史遺産などをも破壊し、家族、友人、地域の連携までをも犠牲にする経済成長は、人間の生活する国家の目標とはならないからである」という内容である。最近では世界三位になったものの、GNPでは依然として大国である現在の日本国民には痛烈な皮肉にも相当する指摘である。

震災を目標転換の契機に

幸福を定義できないことは自明であるが、被災して食糧や燃料にも事欠く生活をしている人々に、数日経過しても何物も配達できない経済大国が、国民にとって幸福な国家ではないことは確実である。しかし、それは我欲が横溢している政治だけの責任ではなく、自立の努力よりは支援の獲得に奔走してきた、ある意味ではGNP信奉の国民にも相応の責任がある。この日本史上有数の災害を契機に、喪失した精神を再度確認すべきである。

英語に「マイダス・タッチ」という言葉がある。ギリシャ神話に登場する王様ミダスが神様の一人をもてなした見返りに自分が接触するすべてを黄金に変換する能力を手中にする。しかし、料理も子供も黄金になってしまう事態で目覚め、その能力を返上したという物語である。幸運にも震災が浮上させた日本国民に天賦の善心が残存しているうちに、マイダス・タッチを反面教師とし、転換すべき目標を発見する必要がある。